

B 83 衣服と環境温度にかかわる快適性（第5報） 寒冷暴露時における皮膚温
からみた薄着の者と厚着の者の特性
大阪教育大 ○奥窪朝子 山口大医・公衛 酒井恒美

目的 既報において、温熱的に快適な着衣量には標準化着衣量でもかなり大きな個人差のあることを明らかにするとともに、その個人差を支配する要因について報告した。本報では、薄着の者と厚着の者での寒冷暴露時における特性を皮膚温の面から追究した。

方法 実験的追究の被検者は、20～24歳の健康な女子学生で、習慣的な着衣で温熱的に快適であった者のうち、薄着の者10名（SL群）と厚着の者10名（SH群）である。また、フィールド・スタディでの被検者は、既報（第35回日本家政学会）において、快適に感じていた20～38歳の女性のうち、薄着の者12名（OL群）と厚着の者12名（OH群）である。これら2群（L・H）は、標準化着衣量のみならず2群を特徴づける個人要因のプロフィール（既報）から定義された。身体8部位における皮膚温（サーミスター温度計による）および温熱感覚（ASHRAEスケール）を測定した。

結果 1) 0.8 clo の着衣で21℃に1hr椅座安静の場合、平均皮膚温はSL群：33.4℃、SH群：32.1℃で、ともに快適域にあったが、両者間には有意差が認められた。特に、下肢部皮膚温の両群での差は顕著であった。2) OLおよびOH群の平均皮膚温は、ともに33℃を示したが、OH群の標準化着衣量はOL群のそれよりも高く、上記1)の所見と符合した。3) 1.0 clo の着衣で18℃に1hr椅座安静の場合、SL群の平均皮膚温は32.4℃に維持されたがSH群のそれは30.0℃を示し、有意に低かった。SL群の全身・温熱感覚は3.5でSH群の2.4に比し有意に高く、皮膚温の所見と一致した。SH群の下肢部皮膚温は特に低値を示した。以上の成績は、低温環境での体温調節機能が薄着の者においてまさることを示唆する。